



石鎚山系の獣と人の歴史

山本貴仁

(特定非営利活動法人 西条自然学校)

1. はじめに

石鎚山系は愛媛県と高知県との境にあり、標高 1982mの石鎚山をはじめ、標高 1500m以上の山々が東西に連なる。中央構造線の南に位置するこの山域は、三波川変成岩類を基盤とし、山は急峻で谷はV字谷となる。

石鎚山系の森林の特徴は、低標高地にはアラカシなど暖温帯林があり、標高 1,000m付近まではモミ・ツガの林、標高 1,200m以上には冷温帯のブナ林、さらに標高 1,700m以上にはシラベなど亜寒帯の植生が見られるという点である。こうした自然環境を保全するために、国立公園のほか石鎚山系森林生態系保護地域、国指定鳥獣保護区に指定されている場所もある。

昭和 30 年代までは、山間部に多くの人が住み、標高 1400mほどまで焼畑や林業、鉱業が盛んに行われていた。尾根を越えて高知県側との交流もあったようであるが、現在は過疎化が進み住む人も少なく、かつての生活の場や耕作地は広大なスギ人工林となっている。

本稿では石鎚山系における大型哺乳類の生息状況を中心に、その移り変わりや人々の関わりについて現地調査、歴史資料、統計資料、聞き取りから得られた情報により述べていく。

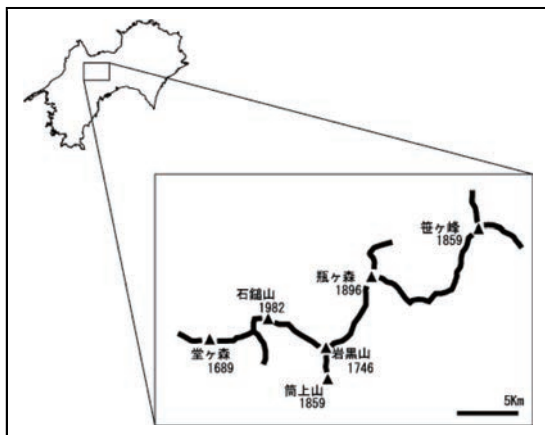


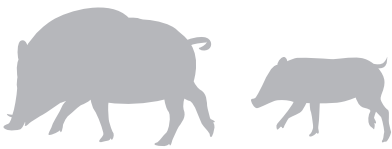
図1 石鎚山位置図



図2 石鎚山系の村々

2. 石鎚山系に生息する大型哺乳類

石鎚山系のイノシシについては、1751年に書かれた寺川郷談、1842年に書かれた西条誌に記述がある。寺川郷談は高知県の町寺川（旧土佐郡本川村寺川）に駐在した土佐藩の山役人が、当時の村の暮らしを書き残したもので、民俗資料として知られている。西条誌は日野暖太郎和尚により1842年（天保13年）編述されたもので、当時の西条藩の各村の様子を伺うことができる。寺川郷談には大雪の時に鹿や熊とともに、猪が狩られたことが記されている。西条誌には、当時



の中奥山村（後に大保木村、現西条市）を訪れた人が、夜になると鐘や太鼓が打ち鳴らされる様子を村人に尋ねたところ、猪から作物を守るためである、と聞いたことが記されている。

ニホンジカは寺川郷談によると、焼畑にて栽培されていた稗、大豆、小豆に対する食害があったとされ、「夜は鹿を迫て夜もすがら寝ず。又或は昼は終日猿を追い」とある。また、「大雪ふれば村人鹿を取によしとて悦ぶ也」とあり、大雪を利用して鹿を狩っていたことが伺える。以後、明治の頃までは生息していたようであるが、面河村での記録によると明治期の大雪の時に大量に捕獲され、石鎚山系からは絶滅したとされる。西条市の大保木地区や黒瀬地区でも明治期まではニホンジカがみられたようである。両種とも、江戸期には石鎚山系に限らず、現在では生息が確認されていない地域にも広く分布していたとされ、愛媛県内各地で狩猟の記録が残されている。

ツキノワグマの記録も残されている。西条誌の氷見組西之川山（後に大保木村、現西条市）の頁には、「熊はこの山、東之川山（後に大保木村、現西条市）などのごとき深山にて取ることにて、浅き山にいるものにあらず。一年に二、三頭ずつも獲るやと問えば、三年に一度、五年に一度、または七、八年に一度のこともあり。一生に一疋も打たざるものもあり。度々見ゆる物にてはなし。」との記述がある。また、稜線を越えた高知県側の本川村（現いの町）では「明治36年（1903年）生まれの古老でも熊猟をした記憶はない。村内に熊塚、熊取新造なる人物伝もあるが、かなり前に見られなくなった。熊狩の猟法については知る者なし。」と本川村誌に記述されている。これらのことから、1800年代にはすでに石鎚山系の個体数は少なかったと思われる。ニホンカモシカは「ニク」と呼ばれ、寺川郷談にはニホンカモシカの毛皮が利用されていたとの記述がある。このように、江戸期には石鎚山系にはイノシシ、ニホンジカ、ツキノワグマ、ニホンカモシカの4種が生息していた。

以後、明治、大正期のイノシシに関する記録は得られていないが、聞き取りによると昭和初期から平成にかけてイノシシを見たり、イノシシに畑が荒らされたりすることはなかったという。平成になった頃からイノシシが目撃されるようになり、現在では毎夜、道路で出会うほどになっている。イノシシ同様に大正、昭和にニホンジカに関する情報はなく、イノシシより遅れて、少数の生息の情報が得られるようになり、近年その数は急速に増加している。

ツキノワグマは、昭和2年（1927年）に中奥山村でクマを撃ったとの聞き取り情報が得られたが、以後確実な記録はない。愛媛県内では、1972年に小田深山から移動した雄の個体が旧中山町の栗園で捕獲されて以降、確実な記録は得られていない。ニホンカモシカは少数が昭和40年代まで生息していたようである。

3. 生息環境と人の暮らし

石鎚山系では1700年代には天然林を伐採しており、寺川郷談には伊予から尾根を越えて土佐に木を盗みに来ることがあったことが記されている。当時、既に愛媛県側では天然の良材は伐採されつくしていたと考えられる。西条市側では加茂川を利用した流送による輸送が可能であったことから、用材生産が盛んに行われた。経済発展に伴い、木材需要は増加し、愛媛県の代表的な林業地域となった。また、別子銅山や石鎚山系に点在する小規模な鉱山の影響も大きかったと考えられる。現在はいずれも廃鉱となっているが、精錬や鉱山労働者の使用する燃料は膨大であり、森林の伐採が進んだと考えられる。江戸から明治にかけて石鎚山系の森林は徐々に伐採され、大



型哺乳類が生息する環境は狭められていったと推測される。第一次大戦後や第二次大戦後も木材の需要は大きく伸び、1960年代になると国の造林推進政策により人工林化は急速に進展した。石鎚山系では急峻な岩場に、苗と一緒に土を運び植林が行われたという。スギは標高 800~1,000m 付近までの谷筋に多く、ヒノキは標高 1,200m 付近までの尾根筋に多く植えられている。

石鎚山系において造林と平行して焼畑（切替畑）が行われていた。四国の山間部では、焼畑は 1950 年代まで盛んに行われており、石鎚山系は焼畑の盛んな地域であった（図 3）。1940 年代の旧東之川村における焼畑の方法は、スギ、ヒノキを伐採し、材を搬出した後、枝葉を集め火入れを行う。火入れを行う時期は春または夏であり、斜面の上から火を着けて徐々に下方へと移動させていく。火入れを行う場所では、周囲の山林に燃え広がらないように火道が切られ、風のおさまる夕方に着火された。火入れ後はスギ苗を植え、同時に 1 年目はヒエ、2 年目はアズキ、3 年目はアワ、ソバ、ジャガイモなどが植えられた。また、ミツマタが植えられることもあった。焼畑では作物は非常によく生育し、鳥獣害もなかったという。

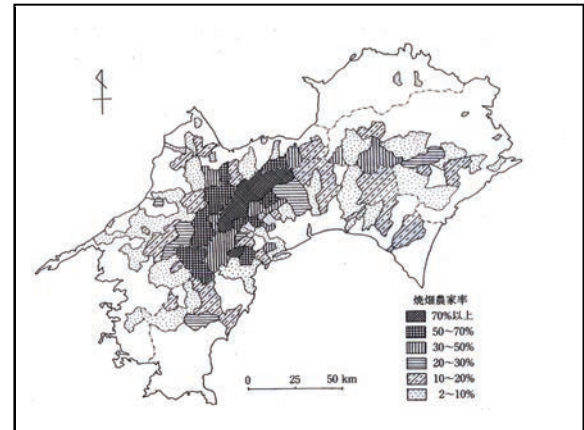


図 3 四国地方の焼畑農家率（1950 年）

篠原 1997 より引用

こうした森林の伐採、利用に加え、狩猟も行われていた。大雪を利用してイノシシやニホンジカを狩ることは、明治まで行われていたようである。狩猟には槍や銃が用いられ、犬を使った猟も行われていた。西条市加茂地区に伝わる民話には、高知から河村甚三という猟師がやって来て槍で熊を狩り、犬を 2 頭連れていたとある。西条誌には各村の銃の数が記されており、高知県側の各村でも 1700 年代の記録では、約半数の家に銃があったとされる（図 4）。石鎚山系においてシシ垣が確認されていないことは、銃によって追い払いや捕獲が行われていたことに関係すると思われる。

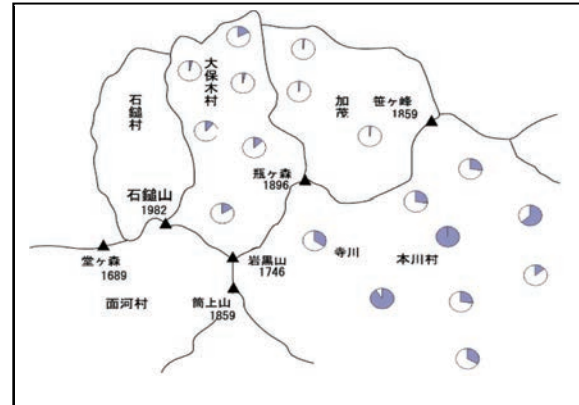
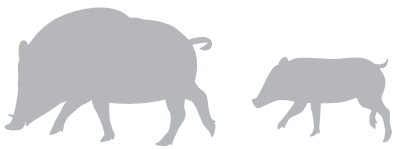


図 4 近世石鎚山系各村の銃所有率

西条誌、本川村誌より作成

旧石鎚村（後に小松町、現西条市）にある諏訪神社の秋祭りは矢先祭（矢幸祭）と呼ばれ、狩猟が盛んであったことが伺える。明治期には、村内の各戸に 1~2 挺の火縄銃があり、毎年春秋の 2 回、村内のいたるところで追い出しという集団で行う共同狩猟が行われていた。

愛媛県（当時、石鉄県）では 1873 年に「銃猟ノ節心得方ノ件」が定められ、銃による猟の鑑札貸与と人家周辺での銃猟が禁止された。また、1877 年に鳥獣猟規則が定められ、職猟と遊猟が区分され、銃で猟を行う場合には免状を受けることが定められている。1924 年に罟の一部が禁止されていることから、この頃には哺乳類の減少が生じていたと思われる。



4. まとめ

石鎚山系は古くから人が住み、山の奥深くまで利用してきたため、大型哺乳類の生息域と人の生活域が重なり、直接的、間接的に個体数に影響を与えてきた。江戸期には石鎚山系にも多くのイノシシ、ニホンジカが生息していたが、明治から昭和にかけて、森林の伐採、人工林化と狩猟により個体数が減少していったと推測される。戦後さらに人工林化が進むものの、その後の外国木材の輸入により木材の価格は下落し、林業は衰退する。鉱山も閉じ、山間部に住む人たちは次々に村を離れた。放棄された畑は藪となり、森林に戻りつつある。植林されたスギ・ヒノキの林も多くが放置されている。山で猟をする人もいなくなり、天敵のオオカミも既に絶滅し、大型哺乳類にとっての脅威はほぼ無くなった。2000年頃から山間部でイノシシによる農作物の被害が確認されるようになり、シカも見られるようになった。現在、イノシシは普通に見られるようになり、防除しなければ農作物を栽培することは出来なくなった。ニホンジカはイノシシよりも奥山に生息するため、農業よりも林業への被害が生じているが、里に向けて徐々に分布を拡大しつつある。

ツキノワグマ、ニホンカモシカは絶滅した一方で、イノシシ、ニホンジカは個体数が回復し、増加しつつある。山間部の畑にめぐらされた電気柵は、現代のしし垣であろう。高齢化の進む集落では、電気柵を設置する意欲すら失われつつある。夜を徹してイノシシを追い払わねばならない時代に戻りつつあるなかで、改めて先人の獣と戦った記録やしし垣の存在を知る意義は大きい。

【参考文献】

愛媛県高等学校教育研究会社会部会地理部門 1993 西条市の地理.

西条市教育委員会編 1985 西条の民話と伝説 第2集. 西条市教育委員会.

篠原重則 1997 愛媛の山村. 愛媛文化双書刊行会.

森川国康 1960 ホ乳類. 石鎚山系の自然と人文. 愛媛新聞社.

春木次郎八繁則 1752 寺川郷談.

※日本庶民生活史料集成第9巻 風俗 三一書房. を参照.

日野暖太郎和尚編述 1842 西条誌

※矢野 益治 1982 西条誌注釈. 新居浜郷土史談会. を参照.

本川村誌 1980 本川村.

山内鉄雄 2009 秘峡 石鎚山麓 消えた村に光を. 新居浜高齢者生きがい創造学園・サークルはづき.